

「キノコ」を食するものたち

関 香菜子（ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室）・山崎 翔気

フィールド調査で山を歩いていると、ふと、きのこが目に入ることがあります。これぞキノコと感じさせる優美な姿をしたテングタケの仲間に遭遇すると、つい足をとめて見入ってしまったり、紅色・白色・緑色など多彩な色があり饅頭型をしたベニタケの仲間が足元に広がっていると、何故かうれしい気持ちになったりと、みなさんもキノコの不思議な力を感じたことはないでしょうか。とりわけ、遭遇したキノコが食べておいしいものであった時は、その場で仕事を放棄したいほどの高揚感に満たされます。

さて、私がプライベートで通っている鈴鹿山脈は、三重県・岐阜県・滋賀県の県境に位置し、標高 1,000m級の山々が連なっています。植生は二次林や人工林が主ですが、標高の高いところにはブナ林が存在し、日本海側と太平洋側の気候の影響を受けることから動植物の多様性が高く、ツキノワグマやイヌワシも生息しています。

2016 年、落葉が進んだ晩秋の頃、標高の高い県境付近の山中を歩いていた時、1 本の立枯木にキノコがびっしりと発生しているのを発見しました。そのキノコは、形はヒラタケに似ており、表皮の色はくすんだ黄色味を帯び、多数が重なって発生していました。これはもしかすると思い、表皮を剥がしてみると、ツルっと剥けました。皮が剥けるキノコ（茸）、その名のとおりに「ムキタケ」です。

ムキタケはブナなどの落葉広葉樹の立枯木や倒木に重なり合って発生するキノコで、秋になると東北地方などでは産直コーナーに並び、地域によっては身近な食用キノコとして親しまれています。



テングタケの仲間（タマゴタケ）



ベニタケの仲間（クサイロハツ）

その一方で、鈴鹿山脈に含まれる三重県では、「三重県レッドリスト 2024」において絶滅危惧 I B 類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に指定されており、鈴鹿山脈内ではそう簡単に見つけることはできません。

鈴鹿山脈では珍しいキノコであるムキタケを観



ムキタケが発生した立枯木（左）と採り頃サイズに育ったムキタケ（右）



削ぎ取られた跡（左）とこれから育ち始める微小のムキタケ（右）

察するべく、毎年発生する時期に現場へ通っていたところ、2022年に大きな異変に気付きました。ムキタケは例年の観察結果から、毎年ほとんど同じ時期に発生していたのですが、この年はムキタケの姿が目に入ってこなかったのです。いったい何が起きたのか、注意深くムキタケが発生していた立枯木と倒木を見てみると、採り頃のサイズに育ったムキタケが削ぎ取られた跡があり、これから育ち始める微小のムキタケだけが少し残っていました。この状況から、何者かによってムキタケ

が採取されたと推察されました。ただし、この場所は、そうそう人間が立ち入ってくる場所ではない…。

異変が見られた翌年からの2シーズン（2023、2024年）、その真相を解き明かすべく、ムキタケの発生する時期の前から赤外線センサーカメラを設置し、立枯木と倒木の撮影を試みしたので、その結果を紹介します。

【2023 年】

（１） 赤外線センサーカメラ設置

ムキタケが発生する倒木と立枯木が写るように赤外線センサーカメラを設置しました。

（２） 結果

ムキタケは 11 月 3 日に発生し始め、その 6 日

後から 22 日後までの間に、ニホンザルとニホンジカがムキタケを採餌している姿が確認されました。

ニホンザルは群れで訪問しており、倒木に腰掛けたり、立枯木に登ったりしながら食べ頃サイズの採餌を繰り返していました。

一方、ニホンジカは、単独または群れでの行動



赤外線センサーカメラ（左）と撮影範囲（右；丸枠内が発生場所）

表 1 2023 年の結果

月日	動物種	採餌	備考
10 月 14 日			カメラ設置
11 月 3 日			ムキタケの発生開始
11 月 6 日	ニホンジカ		付近を通過
11 月 9 日	ニホンザル	○	
11 月 12 日	ニホンジカ		付近を通過
11 月 17 日	ニホンジカ	○	
11 月 18 日	ニホンジカ	○	
11 月 19 日	ニホンジカ		付近を通過
11 月 21 日	ニホンジカ	○	
11 月 25 日	ニホンザル	○	
11 月 26 日			カメラ回収

※上記以外で撮影された動物種：アナグマ、ハクビシン



倒木に腰掛けながら採餌するニホンザル



倒木の付け根に口先を突っ込んで採餌するニホンジカ
(反対側にあるムキタケには気づかない)

が見られ、ゆっくりと歩きながら食べ物を探し、目先にムキタケがあれば採餌していました。そのため、倒木の反対側に食べ頃サイズのムキタケがあっても、目に入らなければ食べられることはなく、そのまま残されていました。おそらく、ニホンジカにとってムキタケはそれほど食欲をそそるような食べ物ではないのかもしれませんが。

【2024 年】

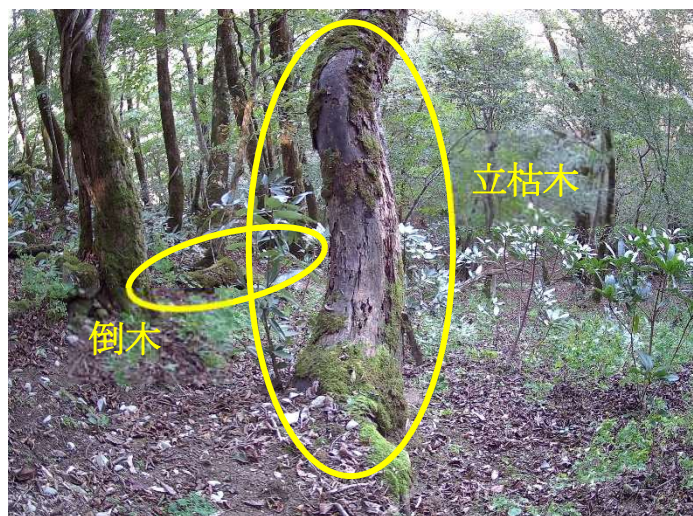
(1) 赤外線センサーカメラ設置

2023 年は倒木をメインに撮影しましたが、2024 年は立枯木をメインに撮影するために、逆側からの撮影を試みました。

(2) 結果

2024 年は夏の暑さが続いたため、キノコの発生時期が遅く、前年に比べて 9 日遅い 11 月 12 日にムキタケが発生し始め、その 4 日後から 10 日後までの間にニホンザルのみがムキタケを採餌している姿が確認されました。

ニホンザルによる採餌が確認されたことは前年と同じ結果でしたが、2024 年の撮影状況で特に驚いたことは、ニホンザルが採餌をしていた時間帯です。ムキタケの発生が確認できた 3 日後 (15



赤外線センサーカメラ (左) と撮影範囲 (右 ; 丸枠内が発生場所)

表2 2024年の結果

月日	動物種	採餌	備考
10月12日			カメラ設置
11月12日			ムキタケの発生開始
11月12日	ニホンジカ		付近を通過
11月15日	ニホンザル		付近を通過
11月16日	ニホンザル	○	※深夜に採餌
11月19日	ニホンジカ		付近を通過
11月21日	ニホンザル	○	
11月22日	ニホンザル	○	
11月23日	ニホンザル		付近を通過
11月24日	ニホンジカ		付近を通過
11月25日	ニホンジカ		付近を通過
11月27日	ニホンジカ		付近を通過
12月1日			カメラバッテリー切れ

※上記以外で撮影された動物種：アナグマ、イノシシ、ハクビシン、ホンダタヌキ、ホンダテン、ホンドリズ、アオゲラ、オオアカゲラ、カケス、コガラ、コゲラ、シジュウカラ、トラツグミ、ヤマドリ



深夜（午前1時～4時）に出現し、採餌をするニホンザル



日中における倒木（左）と立枯木（右）での採餌

日)の午後5時頃、1頭が立枯木の前を通過しており、その晩は周辺で休息していたと考えられました。日付が替わった16日午前1時頃、突如1頭のニホンザルが立枯木に現れました。その後、断続的に1個体ずつが現れては採餌をする行動が、午前4時まで繰り返されました。

ニホンザルの深夜における活動は22日午前3時前にも確認され、この時は採餌をしませんでしたが、群れの中で追い回す行動をしており、深夜でも活発な活動が見られました。

ニホンザルは前年と同様に、ムキタケを一度採餌し始めると食べ頃サイズを採取し尽くす行動が見られました。2024年にニホンザルによる採餌が確認できなかったのは、ニホンザルによって食べ頃サイズのムキタケが既に食べつくされていたためと考えられました。

以上の2シーズンにわたる赤外線センサーカメラを用いた撮影により、今回の目的であった2022年の“異変”の真相究明において、ムキタケを食べるものの正体を明かすことができました。こうして、スッキリとした気持ちになったのも束の間、ふと、新たな疑問が浮かんできました。

一つ目は、ここで観察されたニホンザルやニホンザルは、どのようにしてムキタケを食べられるキノコと認識できるようになったのか。長い目で

みると適応進化と表現できると思いますが、食べたことのなく毒かもしれないキノコに初めて口を近づける場面を想像すると、ちょっと恐ろしい気分になります。人間の世界でも、毎年のように毒キノコによる食中毒が起きていますが、他の動物にも同じようなことが起きているのか気になります。

二つ目は、野生動物とキノコはどのような関係性をもっているのか。近年、今回と同様に赤外線センサーカメラによって、エゾリスがベニテングタケを採餌するシーンが撮影され、話題にあがりました。一步引いて考えてみると、人間はキノコに魅了された動物の一種であり、他の動物もキノコと強い関係性を持っていても何ら不思議ではありません。鈴鹿山脈の一部では絶滅危惧ⅠB類に指定されているムキタケは、今後、ニホンザルなどに食されることによって、どのような影響を受けるのでしょうか。

「キノコ」を食べるものたちを明らかにしたいというきっかけは、いつしか壮大なテーマを持ちかけることとなりました。